会議・視察報告 Conference Reports・Inspection Visits

■第４回「新しい北東アジア」東京セミナー
ー北東アジアの中の日本ーアメリカの視点から

ERINA調査研究部研究員　三村光弘

多国間・多地域間の視点から日本と北東アジアの新しい関係を探る「新しい北東アジア」東京セミナーシリーズ（ERINA主催、笹川平和財団助成）の第4回が2005年１月18日㈫、東京都港区の東京アメリカンセンターにおいて同センターとの共催で開催された。今回は講師に米国議会超党派議員訪問団の団長として、ロシア、中国、北朝鮮、韓国を歴訪してきたカート・ウェルドン（米連邦議会下院議員、共和党）氏、討論者に李鍾元（立教大学法学部教授）氏、コメンテーターに同議員訪問団員のシルベスター・レイズ（米連邦議会下院議員、民主党）氏、ロスコー・バートレット（米連邦議会下院議員、共和党）氏を招き、同訪問団の活動内容、特に平壌での北朝鮮政府当局者との対話の内容を紹介するとともに、北東アジアの中での日本の果たす役割について、アメリカの視点からの議論が展開された。

（ウェルドン）今朝は代表団から他に２人の議員に同席願い、この10日間にわたる訪問の印象を合わせて語ってもらう。数年前に北朝鮮が1994年の米朝枠組み合意に違反していることを知ったとき、私たちは対話が不足していることを懸念した。この違反の重要性と意義、地域の各国との友情関係、核ミサイル拡散を懸念して、議会は北朝鮮との対話を始めた。2003年５月、８ヶ月にわたる努力の末、超党派の代表団を率いて平壌を訪問する許可を得た。これはアメリカの議員と北朝鮮の指導部とが持つ初めての会合で、当時の最高人民会議の議長と金桂寛外務次官に会うことができた。

北朝鮮側は最初の訪問で私たちを非常に気に入ってくれ、２度目の訪問を招請してくれた。私は、次回の訪問のためには、北朝鮮が６者協議のメンバーとなり、第１回目の会議に参加してもらいたいと伝えた。その年の８月、北朝鮮は６者協議の第１回目の会議に参加した。

2004年の秋に再び招かれ、民主党５人、共和党５人の10人からなる訪問団を組織した。しかし、政府内で、空軍機の使用を拒否する動きもあった。北朝鮮側は東京まで飛行機をよこすからそれに乗って来て欲しい、あるいは非武装地帯を開放するから車で通過してもらえばいいと提案してきた。

私たちはブッシュ大統領に反対したわけではない。３人の民主党員もこの代表団に入っている。しかし私たちは超党派代表団として一致してブッシュ大統領の外交政策を支持している。私たちの立場と、ホワイトハウスの立場、６者協議に入っている５カ国の立場に違いはない。

今回の訪朝は到着から出発までまさに異例だった。我々の望む場所へは、どこでも行けるように取り計らってくれた。平壌市内では４時間にわたりビデオを撮った。その中にはアメリカの情報機関が決してそのようなことはできないだろうと言った地下鉄もある。地下鉄や街で会った英語の話せる学生たちとも話をした。1,000枚以上の写真も撮った。唯一写真が撮れなかったのは、皮肉にも統一通り市場の中で、そこには何千人もの朝鮮の人たちが、肉、野菜、食料品、家具、靴、衣料品などを自由に買っていた。外務省の役人は写真をとりたいという私たちの希望を適えようとしてくれたが、買い物をしている風景は撮って欲しくないという市場のマネージャーの意見に抵抗できず、その市場だけ写真が撮れなかった。

金日成の写真が撤去されているという噂は、事実ではなかった。金日成の写真はこれまで通り、あちこちで見られた。平壌の中心街にある交差点の大きな看板にあった写真だけがなくなっていた。それは韓国人兵士の後ろにアメリカ市民が立ち、それに対して北朝鮮兵士が銃剣で胸を突き刺している写真だった。2003年の最初の訪問時、最高人民会議の議長が、ブッシュ大統領が北朝鮮を悪の枢軸と呼んだことについて、「議員さん、私が邪悪な人間に見えますか」と聞いたので、「いいえ、邪悪な人間には見えません。大統領は、個人ではなく国の行動について言っているのです。では、私は、胸を銃剣で突き刺したい人間ですか？」と聞き返した。「どういう意味ですか」と聞かれたので、「北朝鮮の兵士が銃剣をアメリカ人の胸に突き刺している写真のある大きな看板の下を10回くらい通りました。私の胸にも銃剣が刺さったほうがいいと思いますか？」と聞くと、彼は頭を下げて面目を失ったような顔をして「いいえ、私にはそういう意図はありません」と答えた。その看板は取り払われた。実際、最初に訪れたときにあちこちに見られた多くの反米レトリックの看板は、取り外されていた。

今回の話し合いは圧倒されるほど建設的なものだった。目的は６者協議を再開させることであり、北朝鮮の方では私たちが平壌に来るだけでも非常に困難であることを理解し、リラックスして付き合ってくれた。金外務次官とは３

日間で10時間にわたり率直な討論を行った。金永南最高人民会議常任委員長とも会談した。この20年の間で彼に面会できたアメリカ人はジム・ケリー次官補、オルブライト国務長官、ウィリアム・ペリー国防長官の３人だけだ。90分にわたる会合は、お互いの対話、真の議論だった。常任委員長は、北朝鮮がアメリカの友人になり、敵対関係を終わらせたいという希望を述べた。外務大臣や李将軍との会合も率直で気取らないものだった。私たちは外交官ではできないことをしたのだ。

最初の訪問で金桂寛外務次官と話をした際に、ブッシュ大統領がけしからぬことを言うと怒っていた。アメリカと北朝鮮の関係が気まずくなったのはブッシュ大統領のせいだと言った。クリントンの方が良かったというわけだ。

今回、北朝鮮には不利な状況であると伝えた。私は日本に対するミサイルの発射を例に挙げている。北朝鮮の行動をみて、アメリカは現在年間100億ドルを使ってミサイル防衛システムを作り、同盟国を大陸間弾道その他のミサイル攻撃から守ろうとしている。今年、新しい一連のバンカーバスターという兵器の開発を提案している。それはどのようなものかというと、地中を走り、地下の要所や軍事基地を破壊する核兵器だ。議会ではこの兵器についてはわずか１票差で否決されたが、北朝鮮が態度を変えなければ、今年は、北朝鮮の地下設備を狙ったこのバンカーバスター兵器に対する予算が通る可能性がある、と伝えた。

私は昨年、リビアに２回行った。１月に40年ぶりに代表団を率いてカダフィ大佐と会談し、ブッシュ大統領の大量破壊兵器撤廃を支持すると伝えた。３月２日、２回目の訪問で私はカダフィ大佐の演説５分前に全土に向かって話をした。北朝鮮には、「リビアを見てごらんなさい、カダフィ大佐を。私たちはカダフィ大佐もその政権も嫌いだが、カダフィ政権は続いているし、私たちは大佐を解任してもいないでしょう。２国間の関係は正常化し貿易も行われ、経済的な交流もあります」とリビアを一つの例として話をし、北朝鮮もこのようにして核兵器開発を止め、周辺地域の中で、またアメリカとの間で新しい関係を結ぶことができるのではないか、と言った。胡錦濤主席とプーチン大統領は、朝鮮半島における核兵器は許さないと発言している。日本はアメリカの友人だ。正常な関係をもつためには、日本人の拉致問題を解決しなければならないと伝えた。北朝鮮側はこの問題についての回答を避けた。私は、それでは日本へ行ったらそのように発表しますと答えた。私たちの関心事は、核兵器を完全に透明性をもって廃棄することと、日本人拉致被害者の問題解決について協力することであり、この問題に対して、北朝鮮は日本へ直接回答すべきであると伝えた。

この訪朝の最大の成果は、私たちの発言から来たものではない。いくつか例を挙げてみると、今回の通訳には国務省の大統領通訳のトム・キムが同行した。彼は北朝鮮に16回行っていて、オルブライト氏、ペリー氏、ケリー氏の通訳も務めた人だ。個人的に、また韓国での記者会見でも発言いたが、オルブライト氏が平壌を訪れた時代も含めた過去17回の訪問の中で、北朝鮮がこんなにオープンで生き生きとして胸襟を開いたことはなかったそうだ。彼はちょうど今、国務省に戻ってこの訪門の報告をしているところだ。

出国前に李根外務省米州局副局長と１時間あまり会談をした。彼は私と一緒に朝鮮中央通信社（KCNA）のプレスリリースの概要を考えたいと言った。私たちアメリカ人の一団が自らの訪朝についての評価を朝鮮中央通信社と一緒に考えたのだ。平壌出発前に、私はプレスリリースがどんなものになるかすでに知っていた。ソウルに着いたとき、KCNAはまだプレスリリースをしていなかったが、韓国のメディアに「内容はわかっています。私が北朝鮮を離れる前に一緒に相談したのだから」と言った。数時間後、私たちはこの発表を見たが、異例でまた前向きなものだった。ソウルでも発表したとおり、北朝鮮は６者協議に戻ると言った。ただ、タイミングには２つのことを考えなければならない。まず、まもなくわかる第２期ブッシュ政権の顔ぶれ、そして最も重要なのはワシントンの発言だ。北朝鮮は、今週行われるブッシュ大統領の就任演説、２月２日の一般教書演説の内容、今日ワシントンで行われるライス氏の指名公聴会の行方を非常に熱心に見守っている。もしそれらの中で彼らを怒らせるような発言が出ると難しい状況になると思うが、そういうものがなければ、２月の中国の春節後には会談に戻ると思う。これからもっと代表団のメンバーも増やしてくるのではないかと思う。

最後に、私は北朝鮮とその他５カ国の議員が、できれば３月の後半に北朝鮮で非公式な会合を開くことを考えている。このセミナーは決して政府主導の公式なものではなく、少数の議員がそれぞれの国の様々な立場についてディスカッションや対話を通じてお互いを知ることができればいいと思っている。夕べ５人の日本のベテラン議員にお会いして、その可能性についても話をした。

続いて、同行議員の二人にも意見を聞きたいと思うが、まず民主党議員で私の良き友人であるCIAを監督する情報特別委員会のメンバー、レイズ議員にコメントをいただきたいと思う。

（レイズ）昨夜、私たちは駐日アメリカ大使と会い、私た

ちが今回の訪朝で得た成果について話をしたが、一番大事なことは、議員として訪朝したことだと言われた。65万人を代表する議員として、異なる経験や背景、政治的な考え方をもっているが、外交官でも交渉役でもなく、それぞれが個人の経験、考えに基づいて、何を伝え、なぜこういうことが世界にとって大事なのかを伝えに来たことを強調した。

１年半前の最初の会談のときに、北朝鮮はイラクでの出来事を見守り、そこから教訓を学んだと言った。悪の枢軸の一員というレッテルを貼られたことで、ブッシュ大統領が政権の転覆を望んでいるのではないかと懸念し、核を保有することによって自分を守ることができるのではないかと考えたと言った。それによって、イラクやサダム・フセインと同じ運命を辿らなくても済むようにということだ。２度訪れた代表団員の１人であり、３回目の訪問も約束してきた者として、私たちから見ても、北朝鮮側の視点から見ても、次なる問題はアメリカ国内の政権との取引、交渉だと思う。我々の帰国後２週間ほどで大統領の就任演説が行われるが、この演説はアメリカ国内だけでなく全世界に向けて発信されるものであり、一般教書も同様だ。それを北朝鮮は非常に注意深く見ると思う。イラクから学んだ教訓も考えた上で、演説を聞きながら、何か希望のもてる徴候があるかどうか、北朝鮮に対して否定的なメッセージが含まれていないかどうかを、極めて興味深く見守ると思う。

（ウェルドン）今回、北朝鮮を初めて訪れた共和党員で、軍事委員会のメンバーであると同時に10人の子どもの父親であり、またジョンズホプキンス大学の研究者で、20個以上の特許をもつ、バートレット共和党議員にお願いする。

（バートレット）私からは、あまり話題に上らなかった問題について述べたい。北朝鮮で寒いビルの中に入った時に思った。エネルギーが不足しているのだ。以前、私は議会の科学委員会のエネルギー部会長をしており、エネルギー問題の規模に関して、世界の専門家を集めて２度の公聴会で検討してもらったことがある。現在、世界の石油埋蔵量は約1,000ギガバレルで、新たに発見される油井の数は減っており、今日、発見される石油１バレルに対して消費は６バレルになる。この世界の確認埋蔵量は40年くらいでなくなってしまうのではないかといわれている。また、石油を発見して採掘していくためには、環境にも影響を与える。石炭は中国、アメリカに大量にあり40年以上持続すると思われるが、石炭を利用する上でのガス化、液体化は、環境に大きな影響を与える。ガスの埋蔵量も石油と同じだ。現実的な視点からみて、石油もガスも燃やすにはもったいなさすぎる。例えば石油化学産業がある。窒素肥料の大半は天然ガスからきているもので、窒素肥料がなければ食糧生産は需要に追いつかない。これが北東アジアといったいどういう関係があるのかと思われるかもしれないが、こうした問題は世界が一緒になって対策を立てなければならない問題だ。まずエネルギー効率を高めること。２つ目に節約、次に代替エネルギーを考えなければならない。原子力エネルギーは良いものだが、副産物がある。さらに再生可能エネルギーに目を向けるべきだ。太陽エネルギー、風力発電、太陽光。農業からもバイオディーゼル、大豆ディーゼル、バイオマス、エタノール、メタノールなどのエネルギー源がある。これは一国だけの問題ではなくて、世界的な問題だ。

（李）今回の北朝鮮訪問は非常に大きな意味があり、直接お話を伺うと、報道された以上に中身の濃いものであったという印象を受けた。恐らくこれから６者協議の再開に向けた過程で、今回の訪問のさまざまな成果が具体的に現れてくるだろうと思う。

まず大きな印象として、今回はタイミング的に大事な訪問であり、これまで伝わった以上にかなり深い率直な議論がなされ、中身の濃いものであったと感じた。第２点として、北朝鮮の核問題が表面化して10～15年経ったが、これほど危機が長期化した１つの理由は、不信の壁が非常に強くて、対話が足りなかったことがあると思う。今日、対話という話が何回も出てきたのは象徴的だ。議員外交の重要性は強調してもしすぎることはないと思う。北朝鮮側は、議員外交、世論に対する外交の必要を学習してきている過程にあると思う。これまでの北朝鮮の外交は、権威主義政権の一つの特徴として、政権の実力者、つまり相手国で一番力がある人と取引をして、そこで決められたことをその人が実行してくれることを期待するものだった。クリントン政権の94年の枠組み合意がいまくいかなかった理由の１つも、核カードを振りかざして政権と何らかの合意に達しても、議会とか世論に対する説得力がなければ、民主主義国家というものは政権のある種の合意だけでは進まないという点に対する北朝鮮の認識が弱かったことにあると思う。核問題を巡る米朝関係や、拉致問題を巡る日朝関係についても、議会、世論がいかに重要なのかを北朝鮮にもっと理解してもらわなければならない。そのためには議員外交は本当に重要であるということを今日のお話を聞きながらますます痛感した。

次に、６者協議の担当者でもある金桂寛外務次官の話と

して、満面の笑みをたたえながら、アメリカが私たちが核を完全かつ透明性のある形で放棄するようにしてほしいと言ったという点についてお聞きしたいと思う。６者協議の担当者の発言なので対話の重要性は大きいと思う。ネックとなっている核の放棄というのがどういうものであるのか、その定義と手続き、プロセスがずっと問題になってきたわけだが、その点について、金外務次官を含めた北朝鮮の人との対話に基づくウェルドン議員のお考えをもう少しお聞きしたいと思う。

２点目は、核危機がこれほど長く続いた理由の１つに、北朝鮮側のアメリカに対する不信感や安全保障の懸念が強く、そのために北朝鮮の核に対する執着が強かったことが挙げられる。核を放棄するといいながらも、どういう形で放棄するのかはっきりしなかったので、この核問題がどういう風に解決できるのかが最大のネックになっていた。北朝鮮は核を放棄する意志がある、あるいは今回積極的な態度だったというお話だが、長い経過とウェルドン議員の長い観察の中で、今の北朝鮮の変化が本当に計算されたかけひきなのかどうかを判断できるかお聞きしたい。アメリカが持ちかけているようなグランドバーゲン、完全な廃棄と関係の成熟化というものに対する戦略的な態度の舵をきったのかどうかを改めてお聞きしたい。

もう１つ障害があるとすれば、拉致問題だと思う。核問題は放棄を決めれば道筋が見えてくるところがあるが６者協議の成功、核問題の完全な解決のためには、日朝関係が非常に大事だ。日朝関係を進展させて正常化するためには、拉致問題は避けて通れない。日本は非常に難しい状況にある。北朝鮮のこれまでの対応があまり誠意のあるものとはいえない状況の中で、日本国内では経済制裁論や強硬論が高まっているが、それが効果のある状況でもないので、日本にとってはジレンマだ。これほど世論が集約されているなかで、日本政府がすぐ６者協議とか核放棄協議の進展に積極的に加わるというのも難しい。拉致問題をいかに解決するかは、日本国家だけではなく、アメリカを含めた関係国が、北朝鮮に拉致問題に関する真摯な態度、信頼にあたる態度をどのように示すのかフランクに働きかける必要があると思う。

（ウェルドン）核計画に関しては、１年半前の最初の訪朝の時に、核兵器と核（開発）能力の保持を認め、核燃料再処理加工を行っていることを認めた。その時には、これらの兵器を放棄する可能性もあると言っていた。「アメリカはダブルスタンダードを持っているではないか。我々が抑止力のための核兵器を持つことは好まない、しかしインドやパキスタン、イスラエルに対してはどうなのか。こうした国々には抑止力の核を許しながら、我々にはそれを許さないのは何故なのか」という質問をしてきた。しかし、彼らが何度も繰り返したように核放棄について真剣に考えていることを私たちは確信した。彼らは、アメリカが先制攻撃をしないという保証がほしいのだ。北朝鮮はアメリカがサダム・フセインに対して行ったことを心配している。また、大統領が体制の交代を望まないということの保証も求めている。最終的にはエネルギー、金融などいろいろな形で国民に支援ができる経済的支援を求めている。北朝鮮側は、繰り返しアメリカと北朝鮮は友好国になれる、と言っていた。「フレンズ」というかつて聞いたことのない言葉だ。

日本との関係には、確かに拉致問題という難しい問題がある。拉致問題については、日本だけでなくアメリカの問題でもあると伝えた。北朝鮮側は、拉致問題に関して日本に対応しなければいけないというメッセージを明確に受け止めたと思う。北朝鮮側は回答をしなかったので、何をどうするという具体的な話にはならなかった。まず、日本が何を望んでいるかについて、具体的なゴールをはっきりさせなければならない。８人か10人か100人か、どれだけの人たちの報告が欲しいのかをはっきりさせれば、アメリカと日本とが一緒になってこの問題を提起することができる。外務大臣よりこの問題に関する資料をいただくことになっているので、ワシントンに持ち帰る。

一連の問題解決については、まず、北朝鮮は核の放棄を正式に発表し、地上と地下における核の能力をすべて放棄し、完全で透明な査察を受け入れる。これに１年くらいかかる。そして核拡散防止条約（NPT）に戻る。同時に、アメリカは大使館ではなく事務所を平壌に置き、少なくとも１年間もしくは査察が完了するまで、北朝鮮が同盟国・近隣国を攻撃しない限り、アメリカは先制攻撃をしないことを大統領が保証する。さらに、アメリカは５カ国と北朝鮮が経済政策のための話し合いを始めることを発表し、第２段階で実行に移される。これらを同時に進める。第２段階では、北朝鮮の協力により核施設へアクセスできるようにする。そしてその他５カ国の資金で協調的脅威削減計画を行うことを発表する。これはアメリカが資金を出してロシアの大量破壊兵器の解体を図っているのと同じようなものだ。それと同時に、北朝鮮の恒久承認をし、正常な関係を樹立する。また、大統領の１年間の安全保障を恒久にする。もちろん、もし北朝鮮が周辺国を先制攻撃した場合、私たちは防衛のための行動に出る。

これらの保証を得た北朝鮮は、ウィーンにある欧州安全保障・協力機構（OSCE）のヘルシンキ委員会のオブザー

バーとなり、人権問題の進展を図る。また、ミサイル関連技術輸出規制管理（MTCR）に入り、ミサイル技術を他国に売却しないという確約をする。最終的に正式に支援政策がとられ、議会と政府が協力して、農業、医療、教育、環境、エネルギーなどの分野で実施していくための資金計画だけでなく、NGOや大学と協力していくための体制も作っていく。